

# 雑司が谷旧宣教師館だより

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

第44・45合併号 2009年1月19日発行



副都心線が6月14日に開業し、新しく「雑司が谷」の駅ができました。ありがたいことに、その影響で旧宣教師館へも新たに足を運んでくださる方が増えてきております。

そこで、旧宣教師館の「魅力」を今まで来てくださった方からのアンケートを参考にしつつ、改めてご紹介したいと思っております。

みなさまから寄せられるアンケートの中でとくに多い感想は「和む空間」です。「ここに来ると風の音や鳥の声に気づき、心が洗われる」「落ち着く、こういう家に住んでみたい」などという声をよく頂きます。また、

**「色々なものがたくさんあって楽しいです！いやな気持ちになったりした時はここへ来たりしています」**

豊島区 10代 (小学生) 女性

などという若いひともいます。実は子どものファンも多い旧宣教師館。小学生の常連の子たちのお気に入りには、食堂にあるロッキングチェアと図書コーナーです。休日はお父さんの手をひいて遊びにきてくれる子もいます。

**「文化財を自由に観られるだけで驚きました」**

豊島区 20代 男性

自由見学ができることに感動してくださる方も多いです。旧宣教師館は、1989年から無料で一般公開をしています。1999年には東京都の有形文化財に指定されました。旧宣教師館は、多くの人に文化財を肌で感じて頂き、後世へ継承していくことの大切さを伝えることも役割だと思っています。

戦前の建物のなか「赤い鳥」の本など開いていると、時間がタイムスリップしたようで九州での子供の頃の生活にもどったようでした。久しぶりにゆったりした時間が流れました。横浜市 50代 女性

旧宣教師館は、今年で築102年目となります。ここには102年分の時間が凝縮されています。感性を研ぎ澄ませば、さまざまな時間旅行ができるかもしれません。ご自分の記憶の時間、この館で過ごした人たちの思い出の時間、郷土の歴史・文化の時間。想像の翼を広げて、しばし「雑司が谷タイム」をご堪能して下さい。

**大切に保存されていて素晴らしいと思います。四季おりおり訪れてみたいです。 杉並区 40代 男性**

本館だけでなく、中庭も旧宣教師館の売りのひとつです。季節にあわせて草花が楽しめるように工夫されており、フォトジェニックスポットにもなっています。樹齢の高い樹に会いに来る人、芝生でゴロゴロする人など目的もさまざまです。美味しい空気、あります！



**是非いつまでもこのままの形で残ってほしい建物ですね。残しましょうよ！ 北区 70代 女性**

はい、残しましょう！！

古い建物を「保存」しながら「活用」するという事は難しいことです。この相反した課題に応じていくには、旧宣教師館を大切に思ってください「ひとの心」が必要となります。今までも多くのひとによって支えられてきたように、これからも旧宣教師館はみなさまから愛される館であり続けたいと思います。

目指すのはここにしかないONLY ONEな存在。訪ねてくださった方が何かしら感じてもらえる魅力ある場所であり続けたいと思っております。





# 『赤い鳥』裏読み＋深読み＋斜め読み

## ～児童図書コーナーから広がる歴史ものがたり～



旧宣教師館の朝は窓開けから始まります。建物の風通しをよくするために雨の日以外はほとんどの窓を開け放ちます。気候の良いときは建物の中を吹き抜ける風がとても気持ちいいものです。

ただ、それと同時に悩ましいのは、館内の土ぼこりです。窓を開けておくとどうしてもザラザラとする土ぼこりが入ってしまいます。

とくに児童図書コーナーの本にかぶる土ぼこりには要注意。なるべく1冊づつ拭くようにしています。

しかし、そのような作業を繰り返すうちにあることに気づきました。これは児童図書コーナーから生まれた「点が線」になったお話です。

### ④『赤い鳥』⇒裏表紙の広告

『赤い鳥』は、1918年、大正7年7月に鈴木三重吉が、北豊島郡高田村大字巣鴨（現・目白3丁目17番地）で創刊した月刊の児童文芸誌です。

旧宣教師館では、地域の文化遺産を継承していくために、児童図書コーナーの中に『赤い鳥』コーナーを設け、『赤い鳥』の復刻版が自由に手にとって読めるようになっています。

そんな『赤い鳥』の復刻版ですが、手にしたのならば、是非一度裏表紙をじっくりとご覧になってください。『赤い鳥』は掲載されている広告を見るのもとても面白いのです。

『赤い鳥』は、途中休刊や広告を出さない時期をはさみながらも、17年間で合計196冊刊行されました。その間の裏表紙の広告に注目し、商品別に分類してみると次のような点数になります。（なお本誌内の広告をのぞきます。あくまで裏表紙の広告限定です）

白木屋（現・東急百貨店）1点

保々近藤合名曾社（輸入会社）1点

大日本国民中学曾（学校）1点

森永ミルクキャラメル 1点

カルピス 1点

オベストホルマ（やせ薬）1点

クラブ白粉（化粧品）1点

ライオン歯磨き社常用日記帳 2点

三越デパート 3点

松屋呉服店 13点

ライオン歯磨き製品 64点

クラブ歯磨き製品 77点

広告主は、読者層を想定して広告を出すはずなので、広告を見ることにより『赤い鳥』を手にする読書層が分かります。分類を見ると『赤い鳥』の広告で断トツに多い広告は、歯磨き製品の会社であるライオンとクラブ社の広告でした。またデパートの子ども服のご案内の広告も目立ちます。これにより、都市中間層の消費者を対象としていたことが分かります。

また、化粧品ややせ薬のように子どもだけではなく、成人女性をターゲットにしていることも分かります。

一方で、当時人気のあった『少年倶楽部』（講談社）の雑誌には講義録、出版関係、カメラ、学習機器などの広告が主立っていました。雑誌媒体によってセレクトされる広告も違ったのです。

### ⑤ 広告 ⇒ 三重吉のこだわり

鈴木三重吉の『赤い鳥』への思いは、創刊号から3年間ほぼ毎号に掲載された「標榜語 モットー」で知ることができます。それには「**世俗的な下卑た子どもの読み物を排除して、子どもの純性を保全開発する**」という目標が掲げられていました。

三重吉は、誌面作りにおいて相当なこだわりを持っていました。挿絵や句読点行間の表記にまで、彼独自の美学がありました。

『赤い鳥』の「社告」に広告募集の記事を掲載しています。その文言の中には三重吉のこだわりを反映するかのよう「**俗悪な商品、意匠の劣等な広告は謝絶す**」と注意書きがされていました。

そのためなのか『赤い鳥』の広告で多く採用されている歯磨き関連の広告は『赤い鳥』の紙面同様、物語仕立ての童画（※）調に構成されているものも多くあります。

同じ歯磨きの広告でも、婦人雑誌に掲載されているものとはデザインが違うので、作り手も子ども向けを意識して製作したのかもしれない。

またこの頃から、子どもへの「歯磨き」推進運動が盛んになってきました。国内産の歯磨き粉が生産され、歯ブラシで歯を磨くことも習慣化されてきた時期なのです。それを思うと歯磨き粉の広告は『赤い鳥』の広告として非常にマッチしていました。

（※）童画 大人が子どもむけに描いた絵画のこと。童話の添え物として軽視されてきたものを芸術の域まで高めることを目指した造語。

### ⑥ 大正時代

#### ⇒雑誌メディアの確立

大正時代は、大衆消費社会が成熟していった時代です。また、教育水準の向上により識字率が高まり、都市化の進展や生活文化の向上により、娯楽の意識も高まりました。

大正時代は元禄時代に次ぐ第2の読書時代とも言われます。この時代、多くの雑誌が発行されました。『赤い鳥』の雑誌もその気運の中生まれ出た1冊です。そして、雑誌はマスメディアとして、確立していきました。

それに伴い広告文化も花開いていきます。三越デパートの「今日は帝劇、



明日は三越」やカルピスの「初恋の味」など今の時代にまで残る名コピーも大正時代に生まれます。会社に広告部を置き、広告の科学的研究も始まりました。いかにして大衆の心を掴む個性豊かな広告を表現し、読者に商品を買ってもらえるかが追及されました。

## Ⅲ キャラメル ⇒ 片岡敏郎

『赤い鳥』の裏表紙には、1点だけ森永キャラメルの広告が出ていました(1巻6号12月号)。「散歩に 遠足に 運動会に 森永キャラメル」という文字だけのシンプルな広告ですが、これは広告文案家(今でいうコピーライター)片岡敏郎の広告だと思われます。

誌面内広告には「雪ふこが・雲ふろが・娘やのノをととのえて 坊やにカゼもひかせぬは 森永ミルクキャラメル」という雪だるまの絵のついた片岡製作の広告もあります。前者の広告には「煙草代用」の文字があるので、子ども向けの広告とは意識されていなかったと思われるのですが、後者は、子ども向けを意識して作られたのではないかと推測できます。

森永キャラメルは、明治時代から広告に力を入れており、「森永広告学校」と呼ばれるように、広告に携わる優秀な人材を輩出していきました。片岡敏郎もそのひとりで、のちに寿屋(現在のサントリー)へ移り、1922年(大正11年)ヌード女性を使った赤玉ポートワインのセンセーショナルな広告を発表しました。

『赤い鳥』の誌面内には、ライバル社でもある明治キャラメルの広告も出ています。競合する商品の広告合戦は、広告文化のクオリティを高めていくことにもなりました。その後、「一粒三百メートル」のコピーで一世を風靡したグリコもライバル社として参戦してきます。

## Ⅳ 飴チョコ ⇒ 小川未明

かつてキャラメルは「飴チョコ」と呼ばれていました。明治時代にばら売りされていたところから、そう呼ばれていたそうです。それは、「キャラメル」と印刷された箱で売られるようになって子どもたちから

はそう呼ばれていました。

小川未明は、1923年(大正12年)に『赤い鳥』第10巻3号の中で「飴チョコの天使」という童話を書きました。このお話は、森永キャラメルの箱に描かれた天使をめぐる少しせつない物語です。

小川未明生誕の地、新潟県・上越市の市立高田図書館内には、小川未明文学館があります。その「童話体験の広場」には、この作品にちなんで「からくり飴チョコ」箱と題したキャラメルの巨大オブジェとスツールが常設展示されています。「飴チョコの天使」は、小川未明の代表作にもなっているのです。

キャラメルが子どもたちのなじみの食べ物になっても、名称を広告に積極的に載せても通称名の「飴チョコ」と呼ばれていたのは、とても面白いことだと思います。

ちなみに童話の中に値段が出てきますが、昭和10年のころの森永ミルクキャラメルは大が10銭、小は5銭でした。グリコはおまけ付きで1箱5銭。『赤い鳥』は1冊30銭、童謡レコードは1枚1円前後(1円=100銭)でした。

◆小川未明文学館 新潟県上越市本城町8-30 電話 025-523-1983

## Ⅴ 広告衰退⇒『赤い鳥』の終焉

1923年(大正12年)関東大震災後の不景気により、多くの児童雑誌が廃刊していきました。『赤い鳥』も昭和初期の恐慌の影響を受け経営が成り立たなくなってしまう。

「私どもは『赤い鳥』の貴い使命のために、約11年間、たえず奮闘して来ましたが、最早(もはや)到底経済上の支持が出来ないので、いったん休刊して方策を立て直すことにしました」1929年(昭和4年)4月から『赤い鳥』は休刊となります。

しかし、1932年(昭和6年)『赤い鳥』は復活します。そして、復帰1号から『赤い鳥』はいっさい広告は

引き受けません。とかく誌面が汚くなりますから」と宣言し、復刊後2年間は広告を取りませんでした。返品のない会員制の定期購読でなんとか経営していこうと試みたのです。『赤い鳥』の裏表紙には広告に代わって三重吉のかつての「標榜語 モットー」のようなコメントが毎号掲載されました。

しかし、復帰3年目に「会計に余裕がないので下品でない広告とはとる」ことへ方向転換します。この頃は、会費を滞納する読者や読者数の伸び悩みもあり、また『赤い鳥』は経済的にピンチだったようです。それを裏付けるかのように末尾にある三重吉の通信欄には、『赤い鳥』の厳しい台所事情がよく書かれていました。また、『赤い鳥』全盛期に比べると、広告も取れなくなってきたのかもしれない。

『赤い鳥』は、三重吉の病死により1936年(昭和11年)に幕を閉じます。

「私は期待する、やがて休めた翼を大きく張り、青空へ向かって再び飛び立つ『赤い鳥』を見る日の来るのを。一大光明を放った勢よき『赤い鳥』の姿を」

息子である鈴木珊吉氏は、最後の『赤い鳥』の巻頭に上記の休刊の辞を添えました。最後の裏表紙広告はクラブ歯磨きでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

児童図書コーナーで気になった広告から、色々な物語が広がっていきました。『赤い鳥』1冊をクローズアップしてみるだけでも、その時代の情報を読み解くことは可能なのです。

歴史の面白いところは、点と点をつないでいくと、いつの間にか1本の線につながっていくところ。

旧宣教師館にはまだまだたくさんの点が存在しています!

◇参考 「こどもの再発見—豊島の児童文化運動と新学校」豊島区立郷土資料館 1991年・「AD・STUDIES」2006年8月25日号 財団法人 吉田秀雄記念事業財団・別冊太陽「子どもの昭和史」







## みんな茶目子(ちゃめこ)が好きだった ライオン歯磨き⇒茶目子の日

昭和初期に大ヒットした「茶目子の日」というミュージカル風の歌があります。この歌は、茶目子さんが朝起きて学校へ行き、算術と読本(とくほん)を先生からほめられ、ご褒美に、活動写真(映画の旧称)へ連れていってもらおうという1日のストーリーが描かれています。

この歌の中に「ライオン歯磨き」の固有名詞が登場してきます。この歌を聴くと、当時の女の子の日常生活を知ることができて大変、興味深いです。また、一度聞いたら忘れられないとても面白い曲でもあります。

1930年代初頭、家庭用フィルムの映写機とSPレコードのプレーヤーを同期させることによって家庭でトーキー映画を楽しむことができる「レコードトーキー(ホームトーキー)」が流行しました。(※)「茶目子の日」も1931年(昭和6年)にアニメーション化され、当時人気だった童謡歌手・平井英子さんの歌と合わせて楽しめました。

そんな当時の映像は現在でもリバイバル上映などで見ることができます。また、歌のほうも歌手の高橋クミコさん(現在はクミコさん)によりカバーされたり、当時のレコードがCDとして再リリースされた影響もあり、今でも知る人ぞ知る、名曲になっています。

戦前まで西池袋に住んでいた森田啓子さん(87)も子どもの頃聴いた「茶目子の日」をよく覚えていらっしゃるようです。鉄道員だったお父さんは、とてもモダンな方で小さい頃から家には蓄音機やピアノがあったそうです。幼稚園は、近所の池袋幼稚園へ通っていました。音楽の好きな女の子であったそうです。偶然にもそのようなエピソードがうかがうことができました。

実は、「茶目子の日」を聴いた世代は、『赤い鳥』の読者世代と重なります。森田さんは『赤い鳥』を読んだ記憶はないようですが、子どもの頃好きだった童謡は西条八十の童謡「かなりや」だそうです。

「かなりや」は『赤い鳥』1918年(大正7年)11月号にまずは歌詞だけが掲載されました。翌年の1919年(大正8年)5月号に成田為三によって旋律がつけられ、楽譜を付けて掲載されました。譜面付きの掲載は大反響を呼び、以降、『赤い鳥』は、お話だけではなく歌でも「子どもの純性」を追求しました。「童謡の日」が赤い鳥の創刊された7月1日であるのも、そこからきているのです。

「茶目子の日」と「かなりや」の曲は、学校の教科として歌われていた文語体の「唱歌」とは明らかに違いました。演出家・久世光彦さんは著書『みんな夢の中』文春文庫の中で、「3番か4番ですぐに終わってしまう他の童謡に比べて「茶目子の日」は何倍も長かった。何度も聴かなければ憶えられなかった。歌い方も台詞も、真似をするのが楽しかった。こんな面白い歌はなかった」と書いています。また「茶目子の日」はレコード盤が磨り減るくらいに聴いたそうです。

森田啓子さんの西池袋の生家は、1945年4月13日深夜、豊島区などを襲った空襲により焼かれてしまいました。森田さんは結婚されて中国のほうにいらしたそうですが、戦争で男手をとられてしまっていたために生家では何も荷物を持ち出せなかったそうです。「茶目子の日」を含むレコードも、この日、灰燼(かいじん)に帰したそうです。

(※)「NFC ニューズレター第78号」東京国立近代美術館フィルムセンター 2008年4-5月号参考

## おばあちゃんのおはなし会

児童図書コーナーでは、毎月第1土曜日に「赤い鳥を語り継ぐおばあちゃんのおはなし会」を開催しております。

詩人・小森香子さんが、小川未明の童話と雑誌『赤い鳥』の中から1作品づつを選び、読み聞かせをしてくれます。

おはなし会の魅力は、小森香子さんの身振り手振りを加えた表現豊かな語りです。

また、雑司が谷で育った小森さんならではの地域のお話や子どもの頃に親交のあった小川未明さんについてのお話なども聞けます。

2003年4月からスタートした「おはなし会」も2009年の4月でいよいよ6年目に突入します。

自分で読むのとは一味違う「聴く文学」を楽しみにいらっしゃいませんか。かつて子どもだった方たちの集うアットホームな会となっております。みなさまのお越しを児童図書コーナーでお待ちしております。



◇ 今後の予定 ◇ 2月7日(土)・3月7日(土)  
午後2時～3時 申し込み不要・無料です





(2008年8月6日撮影)

## 雑司が谷から「ヒロシマ」へ

広島原爆ドームと、原子爆弾投下の目印にされた相生橋(あいおいばし)との間に、鈴木三重吉の記念碑が2つ建っています。写真左の像は、台座の部分に「赤い鳥」の文字と馬のマークが施され、その上に三重吉の胸像があります。鈴木三重吉は、1882(明治15)年に広島市猿楽町83-1(現在の広島市中区大手町2-1-13)で生まれました。像の裏面には「大正7年少年少女の雑誌 赤い鳥を創刊主宰し童話童謡つづり方 自由画の開発と振興に後半生をささげわが国児童文学の父とよばれた この功績を記念したのがこの石碑である」と書かれてあります。1964年6月27日、鈴木三重吉の命日に建立されました。

写真右の像は、本の形をした台座に「私は永久夢を持つ ただ年少時のごとく ために悩むこと浅きのみ 三重吉」と書かれてあり、その上に男の子と女の子が座っています。このほかにも、原爆ドームから歩いて15分程の広島子ども文化科学館の前にも鈴木三重吉の記念碑があります。どうしてこんなに三重吉の記念碑が多いのでしょうか。そんな疑問から、戦後に発刊された「ぎんのすず」という児童雑誌にたどり着きました。

### ■旧雑司が谷で蒔かれた種が「ヒロシマ」で芽吹く

1946(昭和21)年8月6日、児童雑誌「ぎんのすず」は創刊されました。広島に原爆が投下されてから1年目のことです。子どもたちに文化の糧(かて)を与えようと広島の小学校の先生で結成された広島児童文化振興会により、低学年用と、高学年用の読み物として出版されました。広島市立中央図書館で、実物を見せていただきましたが、わら半紙に両面印刷されたタブロイド版でした。

その後、松井富一氏が社長をつとめる広島印刷(のちの広島図書)が印刷する本格的な雑誌形態となります。戦後の混乱期で物資不足の中、鮮やかな色刷りの紙面は子どもたちの心を

とらえました。瞬く間に全国展開をしていき、最高時120万部以上の出版部数を誇りました。世界最大級の傷を負った「ヒロシマ」から、戦後の児童文学が各地に発信されたことは、とても凄(すご)いことだと思います。

そんな「ぎんのすず」誕生の背景に、鈴木三重吉の存在がありました。三重吉の綴り方教室や「赤い鳥」運動に影響された方々が、「ぎんのすず」を作り上げていったといっても過言ではないのです。三重吉は広島でとても尊敬されていました。

また戦後の日本で、子どもたちに良質の図書を提供したい、と損得抜きで使命感に燃えていた広島の方たちの姿も鈴木三重吉の思いと重なります。

「ぎんのすず」には、「赤い鳥」で童画を描いていた清水良雄もかかわっていました。彼は、広島に疎開しており、戦後も広島で暮らしました。

清水良雄は、「この戦争のために都会に集中していた文化人が地方に折角散らばったんだからそれぞれの地で出来るだけ自分の蒔ける種をたくさん蒔いておくべきだと思う」「画家として戦後の子供達に与えるものを持つなら、先ずそれを与えることにより大きな意義があると思う」と言っていたそうです。(甲斐信枝著「清水先生の思い出」日本近代文学館編「赤い鳥」復刻版解説・著者索引より引用)。

三重吉の「赤い鳥」スピリットは、彼の死後も脈絡と引き継がれ、旧雑司が谷から広島へ、そして全国へと広がっていったのです。

◇参考文献 森本和子「占領下の翻訳絵本と教育—広島図書について—」(私家版)  
広島図書館「よみがえるぎんのすずの世界」2000年10月11日～11月12日 パンフレット



## ◇雑司が谷アーカイブ「雨に願いを」 雑司が谷地域の雨乞いのはなし



2008年は、全国的に空梅雨となりました。一方で、ゲリラ豪雨と呼ばれるような局地的な大雨も多く、雑司が谷でも、マンホール内で下水道工事をしていた作業員が急激な増水により流されるという痛ましい事故が起きてしまいました。

天気をコントロールできたならば・・・と思うのはいつの時代も同じです。とくに灌漑(かんがい)施設が今のように発達していなかった時代はなおのことそうでした。

「雨乞い(あまごい)」というものをご存知でしょうか。「雨乞い」は、降雨を祈る呪術のことです。雨乞いの方法は大きく分けると5つのパターンに分けることができます。その5つの型をご紹介します。

### ① 山の上で火を焚く型

もっとも広く分布するもので、山の上に薪(まき)を積み上げて火を焚き、鉦(かね)や太鼓を打ち鳴らして大騒ぎをします。これは、模倣(もほう)呪術に当るもので、火を焚いてあがる煙りを雲に、鉦や太鼓の音を雷に見立て、雨の降る条件を演じることで、雨を降らせようとする方法です。

### ② 唄や踊りで神さまをなぐさめる型

唄や踊りで神様を喜ばせて雨を降らせてもらう方法。

### ③ 神仏を怒らせる型

神聖な場所をわざと汚すなど、神仏を憤慨させ、雨を降らせようとする方法。②とは逆の発想。

### ④ 寺社に祈願する型

寺社にこもって、降雨を祈る方法。

### ⑤ 聖地の池から種水たねみづをもらって水をまく型

特定の聖地から水をもらい、寺社や村の水源に水をまく方法。

雨乞いの方法は、その他にも多岐にわたりますが、おおよそこの5つの型に分類できます。

実は、雑司が谷の地域でも、昔は、雨乞いの儀式が行われていました。旧宣教師館から、副都心線の雑司が谷駅に向かう途中に、「祈雨日蓮大菩薩 きうにちれんだいぼさつ」という石碑が建っています。

そこは、宝城寺(ほうじょうじ 南池袋4-7-19)という日蓮宗のお寺で、雨乞いにご利益があることで知られてい

ました。ご住職のお話によると、日蓮大菩薩に祈ると、いい兆(きざ)しが現れ、雨が降るそうです。雨乞いの5つの型でいうと、④の型にあてはまります。

なお、この菩薩さまは、昭和14年にお線香の不始末による火災のために燃えてしまったそうです。

また、宝城寺の隣には、これまた雨乞いで有名な清立院(せiryūいん 南池袋4-25-6)があります。清立院の雨乞いは⑤型にあてはまります。

清立院の雨乞いは、雨の神様をまつる榛名山(はるなさん 群馬県高崎市)などへ、雨乞いに用いる霊水をもらいにいきました。

この⑤の型には、全国的に同じルールがあり、駅伝方式で飛脚(ひきやく)のように水を運びました。これは、途中で休むと休んだところに雨が降ってしまうというので、昼夜を問わずに協力して運ぶのです。

豊島図書館発行の「豊島の歳時記」によると、「この榛名山の水が霊験(れいげん)あらたかな理由として、榛名山の龍が水をとられたことを悔しがり、後を追ってきて雨を降らすから」と書かれてあります。③の型にもあてはまりそうです。

また、江戸名所図会にも描かれた「雨乞いの松」という松の木が、現在でも寺内に残っています。そこの立て札によると1295年、早魃(かんばつ)の年、農民は松の木に集まって雨乞いをしたと寺縁起に書かれてあるそうです。



今でこそ、その面影はありませんが、かつて雑司が谷では、おいしいと評判の「雑司が谷ナス」が大正時代の中ごろまで有名でした。そのほか、大根や青菜なども生産されていました。

農業を営むには、雨水は不可欠であり、天候の順行は死活問題です。だからこそ、雑司が谷の農民たちは、一丸となって雨乞いをしたのでしょう。

現在、雑司が谷では、雨乞いの行事は行われていないようです。けれど、日本各地では今なお、雨乞いの儀式は行われています。

■参考文献 大塚民俗学会編「日本民俗事典」弘文堂  
1975年・豊島図書館発行「豊島の歳時記」1978年



# 「旧宣教師館で遊ぼう!」事業報告



上>カードに記されたものを探す「フィールドビンゴ」を体験  
下>落ち葉を使ったクラフト作品と小枝のイーゼル

「旧宣教師館で遊ぼう!〜ネイチャーゲームとブルーベリーつみ」が7月29日に開催されました。3歳から13歳までの子どもたちと保護者の方、計10組の親子が参加して下さいました。

ネイチャーゲームとは、五感を使って自然を体感していく活動のことです。この日は、カードに書かれたものを自然の中から探す「フィールドビンゴ」と聴診器を木に当てて木の音を聞く「木の鼓動」をしました。とくに木の鼓動は、いろいろな条件が重なって、とてもよく聴こえました。「ゴーって聴こえるよ!」「すごいね!」と皆さん、感動しきり。講師の先生も「こんなに聴こえるのは珍しい」と驚いていました。

そして、そこから木の生命(いのち)を感じ、旧宣教師館の木造建築についても思いを馳(は)せました。庭のブルーベリーも今年は豊作でたくさん収穫できました。また、落ち葉とおが屑でクラフトを作ったり、木のイーゼルを作ったりと盛りだくさんな内容となりました。

「思いがけず、自然と触れ合うことができて楽しかった」というのが、一番多かった感想です。スタッフも、参加者との交流を通して、さまざまな表情を持っている中庭の存在に改めて気づくことができました。

今年度の旧宣教師館は、庭も大切な「財」として考え、「自然と人間」「自然と建物」との関係を探っていこうと試みております。今後も楽しみながら、旧宣教師館の魅力を再発見できるような事業をしていきたいと思っております。どうぞ、お楽しみに!

## 旧宣教師館の上げ下げ窓が修理されました!

旧宣教師館の魅力のひとつでもある上げ下げ窓。この窓は、2枚のガラス窓が窓わくの溝に沿って上下にスライドする構造になっています。それをバランスコントロールしているのは、窓わくの中に入っている細長い2本のオモリです。旧宣教師館にいらしたら、上げ下げ窓の窓わくを見て下さい。オモリは窓わくの内側に隠れて見えませんが、滑車とオモリを結んでいる紐は見ることができます。

このオモリのついた紐は、年月が経つと劣化して切れてしまうことがあります。そのときに窓が落ちてガチャンと割れてしまうこともあることから、上げ下げ窓は別名「ギロチン窓」とも呼ばれています。少し物々しい名前ですね。

そんな上げ下げ窓ですが、旧宣教師館の窓の紐も何本か切れたままの状態でした。それを11月末に専門の建具屋さんにて直して頂きました。これで多くの窓を開けることが可能になり、旧宣教師館の風通しもよくなります。なお、修理の際に撮影した写真は、いずれみなさまにご紹介する予定です。



## 編集後記

先日、雑司が谷公園を散策していたら、絵本に出てくるような緑色をしたエキセントリックな鳥が飛び込んでびっくりしました。ワカケホンセイインコ(孵化したインコ)でした。

旧宣教師館もそうですが、公園カードサンクチュアリにもなっています。

これも雑司が谷の魅力の一つですね。(文責 柳河)



〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷1丁目25番5号 電話 03-3985-4081

HP <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shirayokan/>